訓点資料における動詞命令形の放任用法

北﨑　勇帆

一　はじめに

動詞命令形は、典型的には「窓を開けろ」のような命令や「光あれ」のような希求を表す際に用いられるが、現代語における「何であれ」「いずれにせよ」の如く、逆接仮定条件を提示する際にも用いられることがある。いわゆる「動詞命令形の放任用法」であるが、これは上代には見られない用法であり、[1]・[2]のような、話し手が事態の成立を望ましいと捉えていない命令形の文に由来するものと考えられる。

[1]　うるはしと　さ寝しさ寝てば　刈薦の　**みだればみだれ**〈美陀礼婆美陀礼〉さ寝しさ寝てば　（古事記歌謡八〇・北﨑二〇一六）

[2]　大船を　漕ぎのまにまに　岩に触れ　**覆らば覆れ**〈覆者覆〉　妹によりては　（万葉集巻四・五五七・北﨑二〇一六）

現代語では「アリ」の命令形を用いる「～デアレ」と「ス（スル）」の命令形を用いる「～ニセヨ・シロ」の二系統が認められるが、「ニセヨ・シロ」に比して「デアレ」の系統の方が成立が早く、中古和文資料には「モアレ」（または縮約形の「マレ」）として現れる（中村一九九三）。以降、本稿では語形を「マレ」に代表させる。

[3]　ふるきに**もあれ**あたらしきに**もあれ**、人はさらに見給はじ。（うつほ物語国譲中・七五三13）

[4]　何事に**もあれ**、いそぎて物へ行くべきをりに、まづ我さるべき所へ行くとて、「ただいまおこせむ」とて出でぬる車待つほどこそ、いと心もとなけれ。（枕草子一五四・二八一7）

訓点資料では、既に平安初期の点本に、これと同様の形式の例が見出される。

[5]　世尊現ニ在シテ**マレ**、若ハ涅槃ニ入リタマヒテ**マレ**、我当ニ何ニシテカ菩薩ノ禁戒ヲ分別シ了知セム。《世尊。現在若入涅槃。我当云何分別了知声聞禁戒縁覚禁戒菩薩禁戒（T1582_.30.0961c10-12）》（聖語蔵菩薩善戒経巻一［八一〇頃］春日一九五五・三八）

[6]　若阿練若の処に在（り）て**もあれ**、若樹下に在（り）て**もあれ**、若空舎に在（り）て**もあれ**二の法を念（ず）応（し）。《若在阿練若処。若在樹下若在空舎。応念二法。（T1646_.32.0358a14-15）》（成実論天長点巻二二・四上20［八二八］）

稿者は北﨑（二〇一六）において、主に和文系統における命令形の逆接仮定用法の史的変遷を一通り明らかにしたが、訓読文における当該形式の例を見ると、接続形式・構文などの点において、和文

と訓読文の「マレ」の間には差異があるように見受けられる。例えば右に示した例を一つ取っても、和文ではほぼ規則的に「名詞＋ニ＋マレ」（[3]は準体法であり、名詞と連続する）という形で現れるが、訓読文には「マレ」に動詞が前接する例が多く見られる、といった具合である。

そこで、本稿では、訓読文における命令形放任のあり方、また、和文との具体的な差異を記述し、その差異がどういった事象の現れであるかについて論じる。すなわち、夙に指摘される如く、使用語彙や語の用法に文体間の対立があるように、機能語化した文法形式にも、その機能語化の度合いに差が見られることを論じたい。

以降、第二節にて「マレ」の形態や接続形式、生起環境について、第三節にて構文環境について、それぞれ和文・訓読文の例を比較する。第四節ではそれらの性質が中世和漢混淆文にどのように引き継がれたかに触れ、第五節にて、和文・訓読文に見られる「マレ」の機能差が、文体間の同一語形における機能語化の程度の差として解釈できることを示す。

二　形態的な観点から

二・一　和文において

まず、中古和文における「マレ」について、前接要素、後接要素と、「マレ」そのものの形態の順に見ていく。

「マレ」の前接要素を見てみると、中古和文に見られる例の多くは「名詞＋ニ＋マレ」の例であり、「名詞＋ニテ＋マレ」（一例のみ）が盛んに用いられるのは中世以降になってからである。用言に接続する場合、「動詞連用形＋マレ」、「形容詞連用形＋マレ」、「形容動詞語幹＋ニ＋マレ」となるが、動詞の例は『古今集』の一例のみで、中古和文においては孤例である。

[7]　あが君を取りたてまつりたらむ、人に**まれ**鬼に**まれ**、返したてまつれ。
（源氏物語蜻蛉・六・二五六7）

[8]　「中納言のに**もあれ**、大納言にて**もあれ**、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ」
（落窪物語巻二・二〇三15）

[9]　君といへば見**まれ**見ず**まれ**富士の嶺のめづらしげなく燃ゆるわが恋
（古今和歌集八六〇）

[10]　宮、「いなや。さもあらずや。なを、さるらん。かゝるけしきぞやみ給。すべて、よく**もあれ**あしく**もあれ**、おとこ、女にてぞあるべかりける。
（うつほ物語蔵開上・五六五1）

これらのように、並列の接続助詞的な働きをするものが大半を占めるが、『落窪物語』には二例、「名詞＋ヨリ＋マレ」、「名詞＋ヲ＋マレ」のように助詞が前接し、副助詞のように働く「マレ」の例が見られる。後述するが、こうした現象は、訓読文に、より顕著に見られる。[注一]

[11]　おはすべきほども、いと残り少なうなりにたれば、いとあはれに心細うなむ。これより**まれ**、出で立ちたまへ。京におはせむ限りは見たてまつらむ』
（落窪物語巻四・三二一14）

[12]　〈いかで御心ようなるべからむ〉と、祈りを**まれ**せむ。我らが

ためにも大事なり」と言ひて、　（落窪物語巻四・二九七3）[注二]

「マレ」そのものの形態について、「マレ」は「モアレ」から母音/o/が脱落した形であるが、『落窪』にのみ「モマレ」（モ＋モ＋アレ）と「モ」が重複し、元の形態の意識されない例が数例ある。

[13] 我死なば、代りには、男子に**もまれ**、女子に**もまれ**、君につかうまつれ　（落窪物語巻四・二八一14）

[14] 御消息とて、『いと恋しくなむおぼえたまふを、あからさまに**もまれ**、わたりたまへ。　（落窪物語巻四・三二一12）

形式を構成する用言は、『うつほ』に「もおはせよ」の例が見られる他は、全て「アリ」（「マレ」を含む）である。

[15] ありとあるかぎり、みこに**もおはせよ**、上らうにもあれ、おもてやはみえ給へる。　（うつほ物語国譲中・七六六13）

他、「ともあれかくもあれ（とまれかくまれ）」「さはあれ（さはれ）」「さもあらばあれ（さまらばれ）」[注三]などの、転換に用いられる接続詞がある。これらは和文特有の語彙であり、訓読文には見られない。

[16] たけとり、答へていはく、「**とまれかくまれ**、まづ請じ入れてまつらむ。　（竹取物語・四〇9）

[17] えさらず思ふべき産屋のこともあるを、これ過ごすべしと思ひて、たたむ月をぞ待つ。**さはれ**、よろづにこの世のことはあいなく思ふを、　（蜻蛉日記中・二一九11）

[18] 「**さもあらばあれ**、近うだに見聞こえじ」とて、「御迎へに」と聞こえさせたまへれば、　（和泉式部日記・八七7）

二・二　訓読文において

訓読文においては、『最勝王経古点』について「この古点にも或字・若字・及字を以て同位語を並列した場合に、このニマレを補読したものが多い」（春日一九四二・一八二）、『菩薩善戒経』について「マレ・モアレ　共に補読に用ゐる語であつて、並列の仮定条件を造るに用ゐるが、この点にも見える」（春日一九五五・三八）などの記述があり、特に、平安初期訓点語におけるこの表現を記述したものに大坪（一九八一、第三章「動詞」、第二節「活用形の用法」）がある。

大坪（一九八一）は前接・後接形態によってモアレの用法を一一種に分類し、和文に比べて用例が多く、用法が広いこと、「もはや動詞としての機能を失って…一種の助詞に転生した」ものがあること、特に、「B（注：助詞が後接し、単独で用いられないもの）のやうに、マレの後に助詞の来る例は和文には求められない。Bの用法は、訓読文にだけ存する特殊なものであつて、恐らく翻訳文法の一種であらう。」（一七三頁）ことを指摘されている。

以下、この「和文に比べて用法が広い」ことの具体的な実態を見るため、訓読文における「マレ」の例を、和文の例と比較しながら見ていく。

まず、和文に見られ、また多数を占めていた「名詞＋ニ＋マレ」は、訓読文にもまた広範に見られる。

[19]
後世の苦果を見不（ず）、畏（り）不（ず）アラムイハ、〔於〕我ガ法に帰して〔而〕出-家セラム者（ヒト）の、若（しは）是レ法器に**もアレ**、若（しは）非-法-器に**もアレ**、諸の弟子の所に、悩-乱し呵罵し或（い）は鞭杖を以て其の身を楚撻（イサメウ）チ、或（い）は牢獄に閉（ざ）し、乃至、命を断（タ）ム。《不見不畏後世苦果於帰我法而出家者若是法器若非法器諸弟子所悩乱呵罵或以鞭杖楚撻其身或閉牢獄乃至断命》

（東大寺図書館蔵地蔵十輪経元慶点巻四196［八八三］）

[20]
世尊随て何レの国邑に**もアレ**〔ィ**マレ**〕是（の）如き不空羂索神呪心経を流行せば、当に知（る）《当》し《世尊随何国邑流行如是不空羂索神呪心経当知》（西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点55［一〇四五］）

ただし、次のように「在り」「す」「所在す」などが後接する「ニマレ」は「ニ」を格助詞として解釈し、「マレ」が副助詞的に働くものとして見るべきものである。

[21]
衆生の〔於〕此の瞻部の内に**マレ**、或は〔於〕他方世界の中に**マレ**ありて、作レル所の種々の勝（れ）たる福因には、我レ今皆悉ク随喜を生す。《衆生於此瞻部内　或於他方世界中　所作種種勝福因　我今皆悉生随喜》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻二・四〇19［八三〇頃］）

[22]
而白仏言「世尊、是の金光明最勝王経を、若現在世に**（ま）レ**、若未来世に**（ま）レ**、若在（ら）む城邑に**（ま）レ**、聚楽に**（ま）レ**王宮の楼観に**（ま）レ**、及阿蘭若に**（ま）レ**山沢に**（ま）レ**空林に**（ま）レ**して、此の親王を流布すること有（ら）む〔之〕処には、世尊我レ当に其の所に往詣して、供養し恭敬し擁護し流通（せ）む。《而白仏言世尊是金光明最勝王経若現在世若未来世若在城邑聚落王宮楼観及阿蘭若山沢空林有此経王流布之処世尊我当往詣其所供養恭敬擁護流通》（同巻八・一五一3）

[23]
白言「世尊、此の金光明最勝経王、若現在世に**（ま）レ**及未来世に**（ま）レ**所在し宣揚し流布（せ）む〔之〕処たる、…《白言世尊此金光明最勝経王若現在世及未来世所在宣揚流布之処》

（同巻八・一五五4）

「ニ」を伴わず、「名詞＋マレ」とするものが数例ある。「マレ」の元来の形が意識されずに一語化して用いられたもののようにも思われるが、「ニ」を補読すべきものか、判別し難い。

[24]
若冬**マレ**、若春**マ（れ）**、若夏**マレ**ぞ。汝若千日（を）得たりしとキ。《若冬若春若夏汝得若千日》

（小川本願経四分律古点乙巻・一三24［八二八］）

[25]
子実は成熟して収め獲（エ）、刈（カ）リ已（り）て、藁（カラ）**マレ**幹（カラ）**マレ**、求め不（る）に［而］自然に得るが如し。《子実成熟収獲子已。藁幹不求而自然得。（T0895_.18.0722b26-27）》

（仁和寺蔵本蘇磨呼童子請問経承暦三年点巻上・一一六下1［一〇七九］）

「名詞＋ニシテ＋マレ」は訓読文特有の格助詞的な連語「ニシテ」が接続するものである。中古和文には、対応する「ニテ」[注四]を用いる「ニテ＋マレ」の例は存するものの、次例のように場所格を示す例ではない。

[26]
所求の事に随（ひ）て、実を以て告ゲ知（らし）メ、若聚楽にして**（ま）レ**、空沢にして**（ま）レ**、及僧の住処にして**（ま）レ**、求むル所の者に随（ひ）て、皆円満（せ）令メ、金銀財宝牛羊穀麦飲食衣服を、皆、心に随フこと得（し）メ、諸の快楽を受（けし）メむ。《随所求事以実告知若聚落空沢及僧住処随所求者皆令円満金銀財宝牛羊穀麦飲食衣服皆得随心受諸快楽》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻八・一五〇8）

[27]
若（しは）〔於〕房の中ニシテ**マレ**、若（しは）経行の処にして**マレ**、若（しは）講堂の中ニシテ**マレ**、共に住止（せ）不レ、《若於房中。若経行処。若在講堂中。不共住止。（T0262_.09.0037a29-b01）》

（立本寺蔵妙法蓮華経寛治点巻五・七七下9［一〇八七］）

訓読文特有の格助詞「ヲモテ（を以て）」に接続し、「ヲモテマレ」となる例も見られる。

[28]
皮をば却（け）て、十種の衣の中に、随（ひ）て何の衣を以て**マレ**［誤読カし］、作（り）て畜すること聴す。《却皮十種衣中随以何衣作聴畜》

（小川本願経四分律古点甲巻・一六12）

[29]
答曰　黒黒報の業とは［者］何の業を以（ち）て**あれ**苦惚の処に生（る）ル（に）随（ひ）て。阿鼻地獄（と）［及］余の苦惚の善報无キ処、若畜生餓鬼の中の少分の如キなり。《答曰。黒黒報業者。随以何業生苦悩処。如阿鼻地獄及余苦悩無善報処。若畜生餓鬼少分。（T1646_.32.0299b25-27）》

（成実論天長点巻一一・一〇下1）

「名詞＋ヲ＋マレ」は一例のみ、後続文脈が分からないが、挙げておく。

[30]
不動の真言マレ或「ハ」降三世の真言を**マレ**《不動真言或降三世真言。（T1796_.39.0644c08-09）》

（東寺金剛蔵大毘盧遮那経疏保安元年点巻六［一一二〇］・訓点語彙集成[注五]）

動詞に関わるものとして、「動詞連用形＋テ＋マレ」[注六]などは中古和文に見られないものであった。

[31]
世尊現ニ在シテ**マレ**、若ハ涅槃ニ入リタマヒテ**マレ**、我当ニ何ニシテカ菩薩ノ禁戒ヲ分別シ了知セム。

（聖語蔵菩薩善戒経・［5］再掲）

[32]
若阿練若の処に在（り）て**もあれ**、若樹下に在（り）て**もあれ**、若空舎に在（り）て**もあれ**二の法を念（ず）応（し）。

（成実論天長点巻二二・［6］再掲）

[33]
若（し）我（が）世に在りて**マレ**或（い）は滅度（し）て後にマレ諸そ法華経の一句一偈をも聞（く）こと有らむには、我皆无上菩提の記を授けむとイヘル（が）為に、是（を）无餘記と名（づく）《若我在世或滅度後諸有聞法華経一句一偈我皆為殺无上菩提記是名无餘記》

（東大国語蔵大毘盧遮那成仏経疏永久二年点巻四・五七オ7［一一一四］）

「動詞（助動詞）連体形＋ニマレ」

[34]
復［於］現在の十方世界の一切の諸仏応正遍知の妙菩提を証

（し）たまへルにマレ、无辺の諸衆生を度（せ）むが為の故に、無上の法輪（を）転じ、無礙の法施を行じ、法の鼓を撃（ち）たまふも、法の螺を吹（き）たまふも、法の幢を建（て）たまふも、法の雨を雨（り）たまふにマレ、一切の衆生を哀愍し勧化して、咸ク信受セ令メ、皆法施を蒙（らし）メ、悉ク充足すること得（し）メ、無尽安楽にアラシメたまふニマレト、又復所有ル菩薩声聞独覚の功徳にして、積集せる善根にマレ、若有ル衆生の是（の）如キ諸の功徳具セヌ〔未〕者に、悉ク具足（せ）令むルにマレトヲ、我レ皆随喜す。《復於現在十方世界一切諸仏応正遍知証妙菩提為度无辺諸衆生故転無上法輪行無礙法施撃法鼓吹法螺建法幢雨法雨哀愍勧化一切衆生咸令信受皆蒙法施悉得充足無尽安楽又復所有菩薩声聞独覚功徳積集善根若有衆生未具如是諸功徳者悉令具足我皆随喜》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻三・四八2）

[35] 若人随（ひ）て何の事を念ずる（に）もあれ心［則］随（ひ）て向じぬ。《若人随念何事心則随向。（T1646_.32.0359a08）》

（成実論天長点巻一二一・六下12）

[36] 其の夢の中に而も警界を希（ネカ）フニマレ先承事の法を作る時に《於其夢中而希警界。作先承事法時。（T0893_.18.0686a28-29）》

（高野山光明院蔵蘇悉地羯羅経承保元年点［一〇七四］・曽田一九五七）

「動詞連用形＋テ＋ニ＋マレ」

[37] 善男子、若有（る）苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦の、随（ひ）て何の処に在（り）てにマレ、人の為に是の金光明微妙経典を講説（せ）むトキには、〔於〕其の国土に、皆四種の福利善根を獲む。《善男子若有苾芻苾芻尼鄔波索迦鄔波斯迦随在何処為人講説是金光明微妙経典於其国土皆獲四種福利善根》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻三・五五14）

形容詞には「形容詞連用形＋ト＋マレ」と「形容詞連体形＋ニ＋マレ」がある（[40]「キンマレ」は「キニマレ」の音変化）。中古和文に見られた「形容詞連用形（ク）＋マレ」の例は見られない。

[38] 若ハ多クトモアレ若ハ少クトモアレ貪着セズ（不）。若ハ多クトモアレ若ハ少クトモアレ疑悔无シ。《若多若少心不貪著。欲施施時及行施已。悉生歓喜随所施物若多若少心無疑悔。（T1582_.30.0963a13-15）》

（聖語蔵菩薩善戒経巻一・春日一九五五・三八）

[39] 我等ガ彼の无量の諸仏の出家の弟子の、或（いは）是法器、或（いは）非法器の於に、或（い）は罪-犯有（ア）ルニモアレ、或（いは）罪犯无きにもアレ、枷鏁をもて繋縛し牢獄に禁-閉しき。《我等於彼无量諸仏出家弟子或是法器或非法器或有罪犯或无罪犯枷鏁繋縛禁閉牢獄》

（聖語蔵地蔵十輪経元慶点巻七234）

[40] 若（し）は遠く「キンマレ」、若（し）は近きも「キンマレ」、意に随（ひ）て能く聞（き）たまふ。《若遠若近随意能聞》

（最明寺本往生要集巻中・41ウ4、「」内は一二世紀中後期点）

その他、助動詞「ズ」を伴うものが見られる（和文では古今集の[9]「見まれ見ずまれ」のみ）。

[41] 若（しは）如来の出-世にマレ、若（しは）出世に（あら）不（ず）マレ・常に自（ら）寂滅にして、不可思議なり。《若如来出世若不出世常

自寂滅不可思議》（高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏永保点巻四289［一〇八二］）

［42］若し諸結具し、或は具セ不ぬにマレ結、彼彼の有情聚に従（ひ）て、……諸の蘊の続（き）て生するを相続生と名（づ）ク。《若結具諸或不具結従彼彼有情聚……諸蘊続生名相続生》

（石山寺蔵瑜伽師地論平安初期点巻五二［八三〇頃］大坪一九八一・一七一）

［43］然も是の中に、若（し）は過ニマレ、若（し）は及（は）不してマレ、即（ち）是（れ）道を障（ふ）ル［之］心なり。《然是中若過若不及。即是障道之心。（T1796_.39.0597a04-05）》

（高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏康和五年点巻二・17ウ［一一〇三］）

［44］白毫を念ずる者は、若（し）は相好を見「ルニマレ」、若（し）は見（る）こと得不して「ザルニマレ」、是（の）如き等の人は、九十六億那由多恒河沙（の）微塵数劫の生死（の）［之］罪を除-却せむ。《念白毫者若見相好若不得見如是等人除却九十六億那由多恒河沙微塵数劫生死之罪》

（最明寺本往生要集巻下・1ウ2、「」内は一二世紀中後期点）

以上、前接形式については概ね中古和文における「マレ」よりも接続対象が広い。また、中古和文の場合は前接要素が名詞・形容詞（・形容動詞）のような状態的なものに限られるのに対し、訓読文の場合は動詞に接続する例が見られることが注目される。前接する形式の形態別に用例を分類し、稿末の表一・二に示す。

次に「マレ」の後接形態について見ると、和文に見られなかった格助詞「ノ」「ト」「ヲ」、係助詞「ゾ」の後接例がある。前掲した「格助詞ニ＋マレ＋述部」の例と同様、副助詞的な「マレ」であり、この点についてもやはり、和文と比べて接続が自由であると言える。

「マレ＋ノ」

［45］若有ル男子（にま）レ及女人（にま）レ、婆羅門等の諸の勝族にマレの掌を合セ心を一にて仏を讃歎（し）たてまつるいは生に生に常に宿世の事を憶するモノゾ。《若有男子及女人婆羅門等諸勝族合掌一心讃歎仏生生常憶宿世事》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻二・四一1）

［46］我諸法を知（シ）ルヲモチ、我が一切の法を暁ルヲモチテ、随所有の一切の法に（ま）レ、如所有の一切の法にマレノ、諸法の種類と体性との差別あることをば〔イ差別ヲ〕証したまひたり。《証我知諸法我暁一切法随所有一切法如所有一切法諸法種類体性差別》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻八・一五五14）

「マレ＋ト（並列）」

［47］復〔於〕現在の十方世界の一切の諸仏応正遍知の妙菩提を証（し）たまへルにマレ、…無尽安楽にアラシメたまふニマレト、又復所有ル菩薩声聞独覚の功徳にして、積集せる善根にマレ、若有ル衆生の是（の）如キ諸の功徳具セヌ〔未〕者に、悉ク具足（せ）令むルにマレトヲ、我レ皆随喜す。

（西大寺本金光明最勝王経古点巻三・［34］再掲）

「マレ＋ト（引用）」

［48］若（し）僧の所住の処に在てマレ、若（し）は山窟の中、或（い）は［於］浄室に（し）てマレト（いふ）者（は）、意の所楽の処［及］秘釈に随（ひ）て、上に已に之（を）出（いだ）（し）つるが如（し）。《若在僧所住処若山窟中或於浄室者随意所楽処及秘釈如上已出之》

（東大国語蔵大毘盧遮那成仏経疏永久二年点巻一一・四九オ2）

「マレ＋ヲ」（[47]の例も「マレ…マレト…マレ…マレトヲ」と対格を取る例である。）

[49] 白畳「ヲ」ニ**マレ**或は余の繒帛ニ**マレ**ヲ「ヲモセヨ」《白畳或余繒帛（T1796_.39.0661c03-04）》

（東寺金剛蔵大毘盧遮那経疏保安元年点巻八［一一二〇］訓点語彙集成[注七]）

「マレ＋ゾ」

[50] 若冬**マレ**、若春**マ（レ）**、若夏**マレ**ぞ。

（小川本願経四分律古点乙巻・[24]再掲）

「マレ」の形態に関しては、『落窪』に見られたものと同様の、「モマレ」となって「モ」が重複するものがある。

[51] 是の経王所在（の）〔之〕処に随（ひて）、城-邑聚落、或（は）山沢の中に**もマレ**広（く）衆生の為に敷演流布（す）応（し）。《随是経王所在之処。城邑聚落或山沢中此弘経所広為衆生敷演流布。（T2197_.56.0791c31-0792a01）》

（東大寺図書館蔵金光明最勝王経註釈巻九・六九下9［八五〇頃］）

[52] 或（は）寺内に在（り）てもアレ、或（は）阿蘭若（に）**〔も〕マレ**、或は山泉の間（に）於……念誦す応し。

（石山寺蔵金剛頂瑜伽経中略念誦法平安中期点・大坪一九八一・一七〇）

その他、「アレ」の代わりに「ベシ」が用いられる例がある。現代語では「アレ」「セヨ（シロ）」に固定化しているが、この時点ではまだ、範列的な自由度を保っていたようである。

[53] 若凡夫をも破（す）**可し**、是（れ）聖人に非（ず）。何ぞ重罪と名（づく）ル。《若凡夫可破非是聖人。（T1646_.32.0300a28）》

（成実論天長点巻一一・一二上12）

[54] 出家の弟子の、若（しは）是（れ）法器にも**（ある）べし**、下（は）无戒に至（る）まで、鬢髪を剃し除し、袈裟を被セラム者（ヒト？）を、普（く）善（く）守護し恭敬し供養して〔令〕損悩无（くあら）しめム。《出家弟子若是法器若非法器下至无戒剃除鬢髪被袈裟者普善守護恭敬供養令无損悩》

（聖語蔵地蔵十輪経元慶点巻五85）

なお、当該形式は、中古和文では「モ」が必須であるように見受けられるが、訓読文にはその限りでない、「モ」を伴わない「ニアレ」の例も散見する。ただし、成実論天長点、無量義経古点のいずれも、「モアレ」の確例を持つため、これらの例が「ニアレ」で当該形式が実現していたことを示すものなのか、「モ」を補読すべきものなのかは判断し難い[注八]。

[55] 又経の中に説かく諸の所有の色を若（しは）過去に**あれ**未来に**あれ**内（に）**あれ**外（に）**あれ**麤（に）**あれ**細（に）**あれ**近（に）**あれ**遠（に）**あれ**大（に）**あれ**小（に）**あれ**皆非我にも我所にも非（ず）と知（る）応（し）。《又経中説。諸所有色若過去未来内外麁細近遠大小。皆応知非我非我所。（T1646_.32.0364c10-12）》

（成実論天長点巻二二・四二12）

[56] 若（しは）善男子、善女人の、〔於〕仏（の）世に在（す）に（も）**あれ**若（しは）仏、滅度（し）たまひテ後に（も）**あれ**、是の経を聞（き）たてまつること得て、《若善男子善女子於仏在世若仏滅度得聞是経》

（無量義経古点413［平安末］）

なお、「モアレ」とするか、「マレ」と縮約するかの別について、例えば形容詞補助活用の「クアリ」と「カリ」、打消の助動詞の「ズアリ」と「ザリ」の事例のように、時代が下るにつれて縮約していくというような傾向があるようには見受けられない。『聖語蔵菩薩善戒経』について、「マレ」「モアレ」の「両形用ゐてあるが、或は接続する上の語によって別にされたかもしれない」（春日一九五五・三八）との予測はあるが、一つの資料内で両形が用いられるケースは珍しい。[注九]

三　構文的な観点から

逆接仮定条件を提示し、前件の内容・程度に拘らず後件が成立することを示す場合、その「前件の任意性」の提示の方法としては、次のようなパターンが考えられる。[注一〇]

A・共通する特徴を持つ複数項の単純並列

[57] みこに**もおはせよ**、上らうに**もあれ**、おもてやはみえ給へる。

（うつほ物語国譲中・［15］再掲）

[58] 城邑に（ま）レ聚楽に（ま）レ山沢に（ま）レ空林に（ま）レ、或は王の宮殿に（ま）レ、或は僧の住処ニ**マレ**シテセムトキには、《若於城邑聚落山沢空林或王宮殿或僧住処》

（西大寺本金光明最勝王経古点巻八・一五五5）

B・共通する特徴を持ち、意味的に対立する二語の並列

a・意味的に対立する二項

[59] よき人の御前に、人々あまた候ふをり、昔ありける事に**もあれ**、今聞しめし、世に言ひける事に**もあれ**、語らせたまふを、われにわれに御覧じ合はせて、のたまはせたる、いとうれし。

（枕草子二五八・三八八1）

[60] 仏言（はく）、「多-知-識（に）**マレ**、无-知-識（に）**マレ**、一-切僧に属しヌ。」（と）。《仏言多知識无知識一切属僧》

（岩淵本願経四分律古点巻四〇・二二18［八一〇］）

b・肯定・否定の関係にある二項

[61] 君といへば見**まれ**見ず**まれ**富士の嶺のめづらしげなく燃ゆるわが恋

（古今和歌集八六〇・［9］再掲）

[62] 若実に**マレ**、若不実に**マレ**、此（の）人は現世に白癩の病を得む。《若実若不実此人現世得白癩病》

（龍光院蔵法華経明算点巻八・二六3［一〇五八］）

C・不定語と共起する単項の例示

[63] 何事に**もあれ**、いそぎて物へ行くべきをりに、まづ我さるべき所へ行くとて、

（枕草子一五四・二八一7）

[64] 誰の諸長老に**マレ**、僧ガ此（の）某甲の房を以て某甲に与（へ）

て料理（せ）しむといふことを忍（ずる）者（は）、嘿然せよ。
《誰諸長老忍僧以此某甲房一某甲料理者嘿然》
（小川本願経四分律古点乙巻・一四12）

このうち中古和文には、A「複数項の単純並列」とB・b「肯否の関係にある二項」によるものは例が少なく、B・a「対極的な二項」、C「不定語の単項」によって全称表示を行うものが多い。一方、訓読文の場合は、A「複数項の並列」が多く、C「不定語の単項」は少ないこと[注一一]、また、助動詞「ズ」が用いられるために、B・b「肯否の関係にある二項」も見られることが指摘できる。また、複数項の並列と連動する形で、訓読文には「モシハ」「アルイハ」との呼応例が多い。稿末の表三・四に構文ごとの用例数を示す。

四　中世和漢混淆文における使用状況

中世前期和漢混淆文には、ここまでに述べた漢文訓読文的特徴が引き継がれる例が次のように見られる。当該形式の変遷の全体的な見通しは北﨑（二〇一六）で既に論じたので、ここでは訓読文的要素や「マレ」の一語化と関連するもののみを挙げる。

・「名詞＋マレ」（ニを伴わない）

［65］この陣の吉上**まれ**、滝口**まれ**、一人を、『昭慶門まで送れ』と仰せ言賜べ。
（大鏡・人・三一九6）

［66］其の中ニモ南閻浮提ノ様（アリサマ）、貴きモ賤しきモ、下ル上ル階（しな）モ々モ、男**マレ**女**マレ**、憂（うれへ）无ク苦（く）无キ、一人モ見ずコソ侍れ。
（金沢文庫本仏教説話集・九9）

［67］御へんの一門なん十人**もおはせよ**、則綱が勲功の賞に申かへてたすけ奉らん
（高野本平家物語巻九・越中前司最期・下一六九1）

［68］敵は何十人**もあれ**、それがし一人にやこゆべき。いであへや、対面せん
（曽我物語巻九・三五八8）

・「動詞＋マレ」

［69］破戒ノ比丘ノ不浄財ヲタクハヱンヲハ、知ル**ニモアレ**、不知ラ**ニモアレ**、供養セハ、能施モ所施モ地獄ニ入ヘシト説ケリ
（米沢本沙石集巻二ノ八・三二オ7・北﨑二〇一六[注一二]）

・複数項の単純並列

［70］しかれば、主君にて**もあれ**、父母、親類にて**もあれ**、知音、朋友にて**もあれ**、悪しからむことをば、必ずいさむべきと思へども、世の末にこのことかなはず。
（十訓抄六ノ序・二〇九9）

・肯否の関係にある二項の例示（→［69］知ルニモアレ、不知ラニモアレ）

［71］又云、「若し復、是の経典を受持せん者を見て、其の過悪を出さん、若しは実に**もあれ**、若しは不実に**もあれ**、此の人現世に白癩の病を得ん」等云云。
（日蓮集開目抄・四〇〇10）

・「モシ」「モシハ」との共起

［72］又、「依般若ハラ蜜得阿耨タラ三藐三菩提」トノタマヘルハ、三世ノ諸仏、般若ヨリ出生シ給ハヌハナシ。コレニヨリテ、若ハ滅罪生善ニ**モアレ**、若ハ現世ノ悉地ニ**モアレ**、タヾ般若経

ノ力ニヨルベキ。（法華百座聞書抄・ウ410）

［73］若ハ住持長老ニテ**モアレ**、若ハ師匠知識ニテ**モアレ**、不当ナラバ、慈悲心・老婆心ニテ能教訓誘引スベキ也。（正法眼蔵随聞記巻二・三三九6）

その他、助詞が前接し、一語的に用いられる例も認められる。

［74］今夜ハ可参ズ。其ノ故ハ、駄ノ足折レ損ジテ乗ルニ能ザレバ、明日、駄ノ足ヲ疏ヒ、亦、他ノ馬ヲ**マレ**求テ可参也。（今昔物語集巻一三ノ三四・三六八3）[注一三]

［75］せめて京ばかりを**まれ**、事なきさまに計らひ勤めよ（宇治拾遺物語巻五ノ六・一八一7）

［76］世をしづめん程、法皇を鳥羽の北殿へうつし奉るか、然ずは是へ**まれ**御幸をなしまいらせんと思ふはいかに」との給へば、おとゞ聞もあへずはら〳〵とぞなかれける。（高野本平家物語巻二・教訓状・上九六7）

五　機能語化と文体差

二節・三節に述べた文体間の差異を箇条書きにして再掲する。

- 中古和文では動詞が前接する例が僅少であり、前接語が名詞・形容詞などの状態的なものに限られる一方、訓読文では動詞の前接例が豊富であり、和文に比して接続形式が自由である。
- 和文では接続助詞的に用いられるものが大半を占め、副助詞的なものは『落窪』以外に見られない。一方、訓読文には助詞の後接する例、助詞の前接例が一定数見られる。すなわち、副助詞的用法を持つ。
- 構文条件の観点からは、和文では不定語との共起、対極的な二項の並列の構造を取るものに偏るが、訓読文では複数項の並列に例が偏り、「モシハ」「アルイハ」と規則的に呼応する。すなわち、訓読文における「マレ」は極限性の提示よりも、選択・並列を示す助詞としての側面が強い。
- 和文には「ともあれかくもあれ」「さはあれ」のような固有の接続詞がある。
- 訓読文では多くの場合、一種の資料に対して「マレ」「モアレ」のいずれかが専用される。

その他、共通して見られる現象として、

- 原型が「モアレ」であるという意識の喪失されたものがある。
  - 和文・訓読文に「モマレ」、訓読文に「名詞マレ」など。
- 「アリ」が他の語と交替することがある。
  - 「おはせよ」、「あるべし」など。

さて、これまで、特に文体史研究の文脈において、和文と訓読文では同義の使用語彙に異なりがあること、また、それと並行して、同一の文法範疇で使用される形式にも文体間の対立が見られることが夙に論じられてきたが、[注一四]同一の語や文法形式であっても、用法や環境に文体差が存することも指摘されている。[注一五]本稿で扱った「マレ」もまた、和文・訓読文のいずれにも見られる形式であり、接続形式の広さや用法に異なりがあること、すなわち、文体間に共通する文法形式が、文体によって用法の広さが異なることを述べて

きた。本節では、当該形式が本来取るべき構造からどれだけ逸脱しているか、という点を基準として見ることによって、文体間で同一形式の文法変化の度合いにも差が見られることを確認したい。

まず、この「マレ」が[1]・[2]の「乱れば乱れ」「覆らば覆れ」のような「～ば＋～（命令形）」という同語反復型の表現から派生したとするならば、その成立過程として、次のような「命令形による前文」と「その結果を提示する後続文」の二文併置が、仮定条件節とその結果を示す主節との関係性として捉えられ、一文として再解釈されたことが想定される。

[前文 […モ] アレ]。[後続文]。→ [条件節 […モ] アレ]、[主節]。

この段階では、命令形「アレ」の持つ文終止の機能が節の区切りを示すものとして残存するため、「マレ」は節の末尾に置かれることになる。また、「マレ」が「モ」の機能を保持するならば「マレ」の前接要素は「モアリ」に接続できるはずであるし、「アリ」の実質的な意味を残しているならば、放任される事態は「アル」ことができる句（名詞＋ナリ、形容詞の状態的なもの）に限られるはずである。しかしながら、ここまで述べてきたように、これら三点の制約に対しては、それぞれ次のような逸脱例が見られる。

①「マレ」が節末尾になければならない

－「マレノ」「マレト」「マレヲ」などの、助詞の後接するもの

→ [名詞句 [[…マレ] ノ] …]

－格助詞「ニ」が前接し、「～マレ」が連用修飾語になるもの

→ [[[名詞句 ニ] マレ] …述部]

②「マレ」の前接要素が「モアレ」に接続可能

－「名詞＋マレ」（ニを伴わないもの）や「モマレ」

→ [名詞＋マレ]、[述部] cf.? [[名詞＋モ] アレ]、

→ [[名詞＋モ] マレ]、[述部] cf.* [[[名詞＋モ] モ] アレ]、

③静的な事態が放任される

－「動詞＋マレ」など、動詞が前接するもの

特に一・二点目においては、「マレ」の周辺が、「…モ」のまとまりを「アレ」が放任する [[…モ] アレ] という構造から、前接部が「マレ」に取り立てられる [… [モアレ]] という構造へと変化しており、ここに、接続助詞「マレ」からのもう一段階の変化を見ることができる。繰り返しになるが、こうした例は和文には稀であり、訓読文に広範に見られるものである。[注一六]

無論、「モアレ」が「マレ」と縮約することも機能語化の一つの指標となろう。「マレ」「モアレ」そのものには時代差・文体差は認められないものの、[注一七] 格助詞「ニ」の前接例や助詞の後接例が全て「モアレ」でなく「マレ」であることは注目される。

六　まとめ

以上、本稿では、動詞命令形の放任用法として用いられる「マレ」について、和文・訓読文間で、接続形式や用法に差が見られること、また、その差が文体間の同一語形における、機能語化の程度の差として解釈できることを示した。この「マレ」の事例のみで一般化す

ることはできないが、他にも同様の現象が見られることは予測される。なぜそういった差が現れるのか、という点も含め、検討していきたい。

注

注一　観智院本『三宝絵』に「ニ」を伴わない「名詞・形容詞連体形＋マレ」の例、「動詞連用形＋テ＋マレ」の例がある。いずれも例外的であり、平仮名文を主体とする関戸本の該当箇所では「名詞・形容詞連体形＋ニ＋マレ」とあるところである。

・若ハマコト**マレ**若ハイツハリテ**マレ**ソノトガヲアラハサ（サ）ヽレ或ハタウトキ**マレ**或ハイヤシキ**マレ**ソノ徳ヲホムベシ（観智院本三宝絵下六オ）

・もしはまことに**まれ**もしはいつはりに**まれ**そのとがをあらはさ（さ）ヽれあるいはたうときに**もあれ**いやしきき（ミセケチ）に**もあれ**そのとくをほむべし

（関戸本三宝絵七八ウ）

三宝絵諸本の文体的位置付けについて、関戸本を和文的、観智院本を和漢混淆文的とすることにはなお問題があるが（乾二〇一一）、ここでは当該箇所が二本で対照されることから、観智院本の例が訓読文的要素の混入であるものと見ておく。

注二　慶長古活字版では、[12]の箇所を「いのりをだにせん」（旧大系・二一九15）として、「マレ」を用いない。

注三　「さもあらばあれ」に関しては平安時代の訓点資料には例が現れないものの、図書寮本『類聚名義抄』に「莫惜〈サマラバレ遊〉」（勉誠社影印・二五五1）と遊仙窟の訓の出典を示す項がある。前後関係から考えて、和文語が訓読語に受け入れられたものと見られる（古田二〇〇三）。

注四　築島（一九六三）三二七頁、七〇八頁など。

注五　高山寺蔵永保二年点と同一箇所と思われる部分には次のようにある。

・皆、不動の真言或（い）は降三世の真言を以（て）加持すること（セヨ）一百八遍たり、或（い）は一千八十遍せよ。《皆以不動真言或降三世真言加持一百八遍或一千八十遍》

（大毘盧遮那成仏経疏永保点巻六391［一〇八二］、［］内は長治二年点）

注六　他、「随てマレ」（大東急記念文庫蔵成唯識論演秘平安中期点・訓点語彙集成）の例など。

注七　高山寺蔵永保二年点と同一箇所と思われる部分には次のようにある。

・新浄の白畳を取（り）て或（い）は余の繒帛（ハクヲモテ）をもて先（つ）不動の真言を以（て）法の如く作浄して……即ち毘盧遮那の真言を用（ゐ）よ。《取新浄白畳或余繒帛先以不動真言如法作浄……用即毘盧遮那真言》

（大毘盧遮那成仏経疏永保点巻八165）

注八　次の例も、/moare/ の /a/ が脱落して「モレ」となったものか、「あ」を補読させるものか、語形を決定し難い。

・〔於〕諸の過去の仏の現在（在世）ニ**モ（あ）レ**或（いは）滅後に**も（あ）レ**若（し）是の法を聞クこと有（り）しは　皆已に仏道成（し）き。《於諸過去仏現在或滅度　若有聞是法　皆已成仏道（T0264_.09.0142a17-18）》

（立本寺蔵妙法蓮華経寛治点）

・諸の過去の仏の在世ニ**モレ**、或（るは）滅後に於**もレ**、若（し）是の法を聞クこと有（り）しは皆已に仏道成（り）き。

（同箇所の大坪一九八一による釈文）

注九　例えば『成実論天長点』について、「並列の仮定条件の形。本点に

はニモアレはあるがマレはない」（鈴木一男「成実論巻二十二天長五年点」）。本稿の調査範囲内の訓点資料において「マレ」「モアレ」のいずれかが確定できるもののみを見れば、同一資料内で「マレ」「モアレ」の両方を用いるものは『菩薩善戒経』のみであり、他は全て「マレ」「モアレ」のいずれかを専用しているが、中古和文にはその制約がない。『菩薩善戒経』に見られるのは「形容詞＋トモアレ」と「動詞＋テマレ」の二種であるが、前者は「形容詞＋トモ＋アレ」という構造であるために「マレ」と縮約されなかったのかもしれない。

注一〇　原田・本多（一九九七）も参照。これらに該当しない単項の例示の場合、極限的であることの提示に限られるようである。仮定の副詞の共起が典型的だが、中古和文では「たとえ」類は未発達であり（築島一九六三・吉田二〇一五）、「マレ」と呼応する例はない。

注一一　『成実論天長点』には単項例示の例が一二例あるが、「何の業を／因縁を／縁を以てあれ」のように慣用的に用いられている。巻二二訳注にも「「随（ひ）て何の因縁を以（ち）てあれ」の如き慣用句的表現がすくなくない」ことの指摘がある。

注一二　米沢本を底本とする新全集版では「知るにもあれ、知らずにもあれ」（一一九10）と読まれているが、「ざるにもあれ」と読むところか。なお、当該箇所は『大般涅槃経』の引用・訓読部である。

注一三　東大本（紅梅文庫旧蔵本）では「ニマレ」とある箇所（旧大系三・二五二10）。

注一四　例えば大坪（一九三五）など。

注一五　例えば、文体間における語の意味や用法差については山本（一九八八・一九九三）、田中（二〇一六）、文法形式については小林（一九八二、特に四節「和文語の文法と訓読語の文法」）、杉山（二〇一六）など。

注一六　いわゆる「文法化」研究の文脈（Heine and Kuteva 2002 など参照）では、「モアレ」→接続助詞「マレ」と、接続助詞「マレ」→副助詞「マレ」の一点目・二点目は「脱範疇化」（decategorialization）、三点目は「アリ」の意味の「漂白化」（bleaching）として位置付けることができる。同時に「モアレ」→「マレ」という音形の縮約（phonetic reduction）にも、次注に述べるように文体差が見られ、変化のそれぞれの要素について、文体間で程度差があることが分かる。

注一七　注七に述べたように、訓読文ではある文法形式に対して「マレ」「モアレ」いずれかの語形が専用されており、中古和文では義務的でない。このことは、和文では「モアレ」「マレ」が訓読文と比べて固定的でなかったことの現れであるとも解釈できる。但し、話し手の位相差などを勘案する必要はある。

注一八　全て、「マレ」「モアレ」の別は捨象した。調査資料は稿末に示したものによるが、このうち、著作の一部や『訓点語彙集成』によるもので、解読文の全体を参照できない場合については資料の左肩に＊を付し、参考として載せる。*1は『訓点語彙集成』、*2は大坪（一九八一）、*3は春日（一九五五）、*4は大坪（一九六一）、*5は小林（一九八七）による。これらのうち、*1・*5は文脈が判断し難いため、表三には挙げなかった。表一・二の「φ」は、例えば「名詞＋マレ」のように助詞などを介在しないものを表し、「外護**にマレ**同伴（に**ま**）**れ**」（石山寺本蘇悉地羯羅経略疏寛平点）の後項のように「ニ」が補読される蓋然性の高いものも、全てここに含めた。表四について、『土左日記』には「悪しく**もあれ**、いかに**もあれ**、たよりあらばやらむ」と、不定語が並列される例がある。

調査資料

用例引用に際して、旧字・異体字を通行字に改め、濁点を補った箇所がある。訓読文については、底本に原漢文が示されている場合、《　》内に引用した。底本に原漢文が示されない場合、『大正新脩大蔵経テキストデータベース2015版』（SAT2015：http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php）から、該当箇所のテキストを引用し、SATの記法に従って行番号を示した。岩波書店『日本古典文学大系』を『旧大系』、『新日本古典文学大系』を『新大系』、小学館『新編日本古典文学全集』を『新全集』とする。旧大系の検索は、国文学研究資料館『大系本文データベース』により、新全集についても、ネットアドバンス社JapanKnowledge Libを用いた箇所がある。

［中古和文等］竹取物語・古今和歌集・土左日記・大和物語・蜻蛉日記・落窪物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記：新全集（国立国語研究所（二〇一四）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ1.0、長単位データ1.0）による）　／　うつほ物語：室城秀之ほか共編（一九九九）『うつほ物語の総合研究 1』勉誠出版　／　三宝絵：小泉弘・高橋伸幸（一九八〇）『諸本対照三宝絵集成』笠間書院

［訓点資料］聖語蔵・小川本願経四分律平安初期点：大坪併治（一九五八）『小川本願経四分律』（『訓点語と訓点資料』別一）　／　岩淵本願経四分律古点：大坪併治（二〇〇一）『石山寺本四分律古点の国語学的研究』風間書房　／　聖語蔵・東大寺図書館蔵本成実論天長点：稲垣瑞穂（一九五四）「東大寺図書館蔵本成実論天長点巻十二（上）（下）」『訓点語と訓点資料』二・三、鈴木一夫（一九五四―一九六六）一連の「聖語蔵御本成実論天長点訳文稿」、巻一一『書陵部紀要』六、巻一三『奈良学芸大学紀要』四ノ一、巻一四『奈良学芸大学紀要』十ノ二、巻一五『南都仏教』三、巻一六『奈良学芸大学紀要』五ノ三、巻一八『奈良学芸大学紀要』五ノ一、巻二一『訓点語と訓点資料』八、巻二二『書陵部紀要』八、巻二三『南都仏教』一八　／　西大寺本金光明最勝王経古点：春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』岩波書店　／　日本大学蔵妙法蓮華経方便品平安初期点：築島裕・小林芳規（一九五六）「故山田嘉造氏蔵妙法蓮華経方便品古点釈文」『訓点語と訓点資料』七　／　東大寺図書館蔵金光明最勝王経註釈平安初期点：田渕雅生（一九八七）「東大寺図書館蔵本 金光明最勝王経註釈の訓点」『訓点語と訓点資料』七六　／　地蔵十輪経元慶点：中田祝夫（一九五八）『古点本の国語学的研究 訳文編』勉誠社、中田祝夫（一九八〇）『正倉院本地蔵十輪経巻五・七元慶点』勉誠社　／　花野憲道（一九九〇）「随心院蔵「無畏三蔵禅要」訓読文並ヒニ解説 ―平安中期角筆点（慈覚大師点）―」『訓点語と訓点資料』八三　／　妙法蓮華経玄賛淳祐点：中田祝夫（一九五八）『古点本の国語学的研究 訳文編』　／　無量義経古点：中田祝夫（一九七九）『重要美術品兜木正亨蔵 無量義経古点（古点本資料叢刊一）』勉誠社　／　西大寺蔵不空羂索神呪心経寛徳点：小林芳規（一九五八）「西大寺本 不空羂索神呪心経寛徳点の研究 ―釈文と索引―」『国語学』三三　／　東大寺図書館蔵法華文句平安後期点：西崎亨（一九九二）『法華文句」古点の国語学的研究　本文篇』おうふう　／　妙法蓮華経明算点：大坪併治（一九六八）『訓点資料の研究』風間書房　／　仁和寺蔵梵字悉曇字母并釈義治暦四年点：月本雅幸（一九九四）「仁和寺蔵梵字悉曇字母并釈義治暦四年点」『訓点語と訓点資料』九三　／　仁和寺蔵蘇磨呼童子請問経承暦点：築島裕・小林芳規・月本雅幸・松本光隆（一九九五）「仁和寺蔵本蘇磨呼童子請問経承暦三年点」『訓点語と訓点資料』九五　／　大毘盧遮那成仏経疏永保点：高山寺典籍文書総合調査団

（一九八六）『高山寺古訓点資料第三（高山寺資料叢書第十五冊）』東京大学出版会　／　立本寺蔵妙法蓮華経寛治点：門前正彦（一九六八）『立本寺蔵妙法蓮華経古点』（『訓点語と訓点資料』別四）　／　仏説観音普賢菩薩行法経承徳点：門前正彦（一九六八）『立本寺蔵妙法蓮華経古点』（『訓点語と訓点資料』別四）　／　最明寺本往生要集院政初期点：築島裕・坂詰力治・後藤剛（一九八八・一九九二）『最明寺本往生要集 影印篇・訳文篇』汲古書院　／　高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第二・三・五康和点：築島裕（一九九九・二〇〇〇）「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第二康和五年点釈文（一）（二）（三）」『訓点語と訓点資料』一〇三・一〇四・一〇五、築島裕（一九九〇・一九九三）「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第三康和五年点釈文（一）（二）」『訓点語と訓点資料』八四・九一、築島裕（二〇〇七―二〇〇九）「高山寺蔵本大毘盧遮那成仏経疏巻第五康和五年点訳文稿」『高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』平一八・一九・二〇　／　前田本冥報記院政期点：説話研究会（一九九九）『冥報記の研究　第一巻』勉誠出版　／　東京大学国語研究室蔵大毘盧遮那成仏経疏永久二年点：用例検索は『訓点語彙集成』により、本文は原本による　／　高山寺蔵蘇磨呼童子請問経巻上保延三年点：大久保綾子（二〇一五）「訓点資料語彙の電子データ提供に向けての実践的試みⅡ：高山寺蔵『蘇磨呼童子請問経』巻上保延三年点仮名点箇所訓読文用例集」『広島大学日本語史研究論集』一　／　大唐西域記長寛点：中田祝夫（一九五八）『古点本の国語学的研究訳文編』勉誠社　／　築島裕（二〇〇七―二〇〇九）『訓点語彙集成』汲古書院

［中世前期和漢混淆文］今昔物語集・十訓抄：新全集　／　正法眼蔵随聞記・日蓮集開目抄・曽我物語：旧大系　／　高野本平家物語：新大系　／　法華百座聞書抄：小林芳規編（一九七五）『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院　／　金沢文庫本仏教説話集：山内洋一郎編（一九九七）『金沢文庫本仏教説話集の研究』汲古書院

参考文献

乾善彦（二〇一一）「『三宝絵』の三伝本と和漢混淆文」坂詰力治編『言語変化の分析と理論』おうふう

大坪併治（一九三五）「禁止表現法史」『国語国文』五（一〇）

大坪併治（一九六一）『訓点語の研究』風間書房

大坪併治（一九八一）『平安時代における訓点語の文法』風間書房

春日政治（一九四二）『西大寺本金光明最勝王経古点の研究 研究篇』岩波書店

春日政治（一九五五）「聖語蔵本菩薩善戒経点」『国語国文』二四（一一）

北﨑勇帆（二〇一六）「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の変遷」『日本語の研究』一二（四）

小林芳規（一九八二）「古代語の文法Ⅱ」築島裕編『講座 国語史4 文法史』大修館書店

小林芳規（一九八七）『角筆文献の国語学的研究 研究編』汲古書院

杉山俊一郎（二〇一六）「古代日本語における「にして」の意味領域について」『訓点語と訓点資料』一三七

曽田文雄（一九五七）「訓点語彙 ―高野山光明院蔵蘇悉地羯羅経承保元年点―」『訓点語と訓点資料』八

田中草大（二〇一六）「平安時代の変体漢文諸資料間における言語的性格の相違について」『国語語彙史の研究』三五

築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会

中村幸弘（一九九三）「放任表現考」小泉弘・林睦朗編『日本文学の伝統』

三弥井書店
原田康也・本多久美子（一九九七）「日本語の全称量化表現―「も」の〈全称並列〉について―」『早稲田大学語学教育研究所紀要』五二
古田恵美子（二〇〇三）「中国語「遮莫」「任他」等の受容と「さもあらばあれ」」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ人文科学』五
山本真吾（一九八八）「今昔物語集に於ける「速ニ」の用法について」『鎌倉時代語研究』一一
山本真吾（一九九三）「平安時代に於ける動詞「をしふ（教）」の意味用法について―訓点資料の用例に注目して」『訓点語と訓点資料』九二
吉田永弘（二〇一五）「副詞「たとひ」の構文」『国学院大学大学院紀要文学研究科』四七
Heine, Bernd and Tania, Kuteva（2002）*World Lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

付記

本稿は、第一一七回訓点語学会（平成二九年一〇月二二日於東京大学）における口頭発表の内容に基づく。発表の席上、また、本稿の執筆に際して御教示を賜った先生方に感謝申し上げます。
また、本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費 課題番号 16J00119）による成果の一部である。

［きたざき　ゆうほ、東京大学大学院生］

表１　前接要素による分類（訓点資料）[注一八]

		N					Adj			V								
資料名	加点年代	φ	ニ	ニシ	ヲ	ヲモ	φ	クト	ニ	φ	テ	テニ	ニ	ズ	ズニ	ヌニ	ズシ	ザル
岩淵本願経四分律古点	810 頃	2																
小川本願経四分律古点	810 頃	3	3			1												
*3 聖語蔵菩薩善戒経	810 頃							4			2							
成実論天長点	828	12	2			9				1	4		1					
西大寺本金光明最勝王経古点	830 頃	2	25	3								1	4					
日本大学蔵妙法蓮華経方便品平安初期点	830 頃		4															
*2 石山寺蔵瑜伽師地論平安初期点	830 頃	1	3											2		1		
*2 東大寺蔵七喩三平等无上義平安初期点	850 頃		1													1		
東大寺図書館蔵金光明最勝王経註釈	857		1															
地蔵十輪経元慶点	883	4	13						1				1					
*4 石山寺蔵蘇悉地羯羅経略疏寛平点	896	1	1															
*5 石山寺蔵金剛頂瑜伽経中略出念誦法角筆点	900 頃		2															
*1 大東急記念文庫蔵成唯識論演秘平安中期点	950 頃										1							
*1 東寺金剛蔵攝大毘盧遮那胎蔵成就儀軌平安中期点	950 頃		2															
*2 西大寺蔵大毘盧遮那成仏経長保点	1000		2															
無量義経古点	1000 頃		7								6		1					
*2 石山寺蔵金剛頂瑜伽経中略念誦法平安中期点	1000 頃	1									1							
*1 東寺金剛蔵不動尊儀軌寛弘九年点	1012		2?															
西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点	1045		1															
*1 吉水蔵護摩観永承三年点	1048		1															
東大寺図書館蔵法華文句平安後期点	1050 頃								2									
龍光院蔵法華経明算点	1058		2															
仁和寺蔵悉曇字母釈義治暦四年点	1068		4															
*1,2 高野山光明院蔵蘇悉地羯羅経承保元年点	1074		1							1	1		1					
仁和寺蔵蘇磨呼童子請問経承暦三年点	1079	2																
大毘盧遮那成仏経疏永保点	1082		10								2			1	1		1	
立本寺蔵妙法蓮華経寛治点	1087	1	5	3														
*1 来迎院蔵安楽土義康和二年点	1100								2									
高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏康和五年点	1103		2										1				1	
冥報記院政期点	1105						2											
*1 東大国語蔵大毘盧遮那成仏経疏永久二年点	1114		1	1							2							
*1 東寺金剛蔵大毘盧遮那経疏保安元年点	1120	1	6			1												
*1 東寺金剛蔵大虚空蔵菩薩念誦法保安四年点	1123		1															
高山寺蔵蘇磨呼童子請問経保延三年点	1137		5															
*2 築島氏蔵大毘盧遮那成仏経疏院政期点	1138		2															
*1 輪王寺蔵大毘盧遮那経疏仁平元年点	1151		1								1							
大唐西域記長寛点	1163		2															
*1 東大寺図書館蔵因明義草仁安四年点	1169		2															
最明寺本往生要集（墨点）	1180 頃	5	9						6				6					1
*1 醍醐寺蔵大毘盧遮那経疏元暦二年点	1185		4				1				4		1	1			1?	
*1 築島氏蔵金剛頂瑜伽蓮華部大儀軌鎌倉初期点	1200 頃	1																

表３　構文による分類（訓点資料）

資料名	加点年代	単純並列	対極並列	肯否並列	不定単項	その他
岩淵本願経四分律古点	810 頃		1			
小川本願経四分律古点	810 頃	1			2	2
*3 聖語蔵菩薩善戒経	810 頃		3			
成実論天長点	828	2	2		12	1
西大寺本金光明最勝王経古点	830 頃	7	5		1	
日本大学蔵妙法蓮華経方便品平安初期点	830 頃	2				
*2 石山寺蔵瑜伽師地論平安初期点	830 頃		1	3		
*2 東大寺蔵七喩三平等无上義平安初期点	850 頃			1		
東大寺図書館蔵金光明最勝王経註釈	857	1				
地蔵十輪経元慶点	883	1	2	8		
*4 石山寺蔵蘇悉地羯羅経略疏寛平点	896		1			
*2 西大寺蔵大毘盧遮那成仏経長保点	1000		1			
無量義経古点	1000 頃		7			
*2 石山寺蔵金剛頂瑜伽経中略念誦法平安中期点	1000 頃	1				
西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点	1045				1	
東大寺図書館蔵法華文句平安後期点	1050 頃		1			
龍光院蔵法華経明算点	1058			1		
仁和寺蔵悉曇字母釈義治暦四年点	1068	1				
*2 高野山光明院蔵蘇悉地羯羅経承保元年点	1074	1				
仁和寺蔵蘇磨呼童子請問経承暦三年点	1079		1			
大毘盧遮那成仏経疏永保点	1082		4	3		
立本寺蔵妙法蓮華経寛治点	1087	2	2			
高山寺蔵大毘盧遮那成仏経疏康和五年点	1103		1	2		
冥報記院政期点	1105		1			
東大国語蔵大毘盧遮那成仏経疏永久二年点	1114		2			
東寺金剛蔵大毘盧遮那経疏保安元年点	1120	1	2			
高山寺蔵蘇磨呼童子請問経保延三年点	1137	1				
*2 築島氏蔵大毘盧遮那成仏経疏院政期点	1138			1		
大唐西域記長寛点	1163		1			
最明寺本往生要集（墨点）	1180 頃		7	2		

表２　前接要素による分類（中古和文資料）

		N				形動		V	
資料名	成立年代	ニ	ニテ	ヲ	ヨリ	ク	ニ	φ	ズ
古今和歌集	905							1	1
土左日記	935 頃	1				1			
大和物語	951 頃	1							
うつほ物語	984 頃	8				6			
落窪物語	986 頃	6	1	1	1		1		
枕草子	1000 頃	4							
源氏物語	1010 頃	5							
紫式部日記	1010	1							

表４　構文による分類（中古和文資料）

資料名	成立年代	単純並列	対極並列	肯否並列	不定単項	その他
古今和歌集	905			1		
土左日記	935 頃					*1
大和物語	951 頃				1	
うつほ物語	984 頃	2	4		2	1
落窪物語	986 頃	1	2			4
枕草子	1000 頃		2		1	
源氏物語	1010 頃		1		1	2
紫式部日記	1010					1